

“タマノイノコ”に見る風景の予感 ～「ガチャ万」の呪縛を解く～



名鉄尾西線の終着駅・玉ノ井駅近く、線路沿いに五連＋四連のシンボリックな“ノコギリヤネ”（のこぎり屋根の建物を総称してこう呼ぶことにする）が立っている。それが、昨年の台風で大きく破損したままだと聞いた。また、玉ノ井を舞台に、ノコギリヤネのアートプロジェクト構想が企画されていることを聞き、玉ノ井のまちを歩いてみたくなった。一昨年、この座の「玉ノ井散策」に参加できなかったのも、そのルートを通ってみた。そして、玉ノ井駅に戻って来た時には、玉ノ井のノコギリヤネ（タマノイノコ？）にすっかり魅了されていた。ここで展開されるアートプロジェクトを勝手に想像し、気持ちの高ぶりを抑えきれなかった。

そして、もう一つ、大きな衝撃を受けるノコギリヤネに出会った。それは、玉ノ井地区の西端、木曽川に架かる尾濃大橋の足元に立っている。ノコギリヤネの未来に大きな影響を及ぼすものになるであろう。

“ノコギリヤネのある風景”は変わる。そして、玉ノ井は面白くなる。

今枝 忠彦（自称ノコギリアン／一宮市今伊勢町出身／神奈川県藤沢市在住）

○プロローグ／見慣れた風景が、“ノコギリヤネのある風景”に

玉ノ井駅を毎日利用していた人は、目を奪われたことだろう。

台風一過、駅に隣接して佇む“ノコギリヤネ”の壁が大きく破損していたのである。北側の五連のノコギリヤネの半分程、外壁のトタン板が剥がれている。いつものように、改札を抜け、ホームに立って電車を待つ。乗客も見覚えのある人たちだ。しかし、正面にあるノコギリヤネはいつもと違うのだ。毎日見慣れた風景とは違うものがそこにあった。

「これって今、コウバじゃないよね、何に使われているのだろう」、「古いとは思っていたけど、かなりの年代物じゃないか」。あるいは、あらためて屋根のカタチに気づかされた人がいたかもしれない。玉ノ井ははじめ一宮市の北部地域では、ノコギリヤネは見慣れた風景である。日常生活の中でノコギリヤネを意識することはなく、それは風景に埋没してしまっている。

ノコギリヤネはワタシの原風景である。現在は神奈川に住んでいるが、一宮市に生まれ、二十代半ばまで暮らした。そして、都市計画・まちづくりを生業とし、全国各地を巡る中で、この尾張の“ノコギリヤネのある風景”が、どこにもないユニークなものであることを実感した。ノコギリヤネの残る地域は幾つかあるが、この地域ほど広範囲にわたりかつ集積のあるところはない。玉ノ井ははじめ起、奥町、浅井……、一宮市北部地域の人たちに、“ノコギリヤネのある風景”に気づいて欲しいと願っている。これは、決して卑下するものではないのだと。しかし、「ノコギリヤネを活かしたまちづくり」などと無責任なことを言うつもりはない。現役のコウバを含めてノコギリヤネの多くは年老いている。雨漏りや破損が進み、修復困難なものもあるだろう。その処遇は、個々のノコギリヤネの所有者に委ねられている。おそらく、現在、2,000棟とも言われるノコギリヤネは、加速度的に消滅してゆくだろう。その趨勢は、ノコギリヤネに新たな価値が見出されない限り変わることはない。

“ノコギリヤネのある風景”とは何だろうか。かつて、「ガチャ万」と呼ばれた尾張の毛織産業。それを象徴するのがノコギリヤネの立ち並ぶ風景ではなかったか。それが、その面影もなく、忘れられたように片隅に残るものが多い。このノコギリヤネもそのひとつである。駅を利用する多くの人たちも、その存在を忘れていたのではないだろうか。それが、大きな傷とともにそこに立っている。“ノコギリヤネのある風景”が出現したのだ。これは格好のチャンスである。“ノコギリヤネのある風景”とは何を意味しているのだろうか。そんなことを頭の片隅に置いて、玉ノ井のまちを歩いてみることにした。



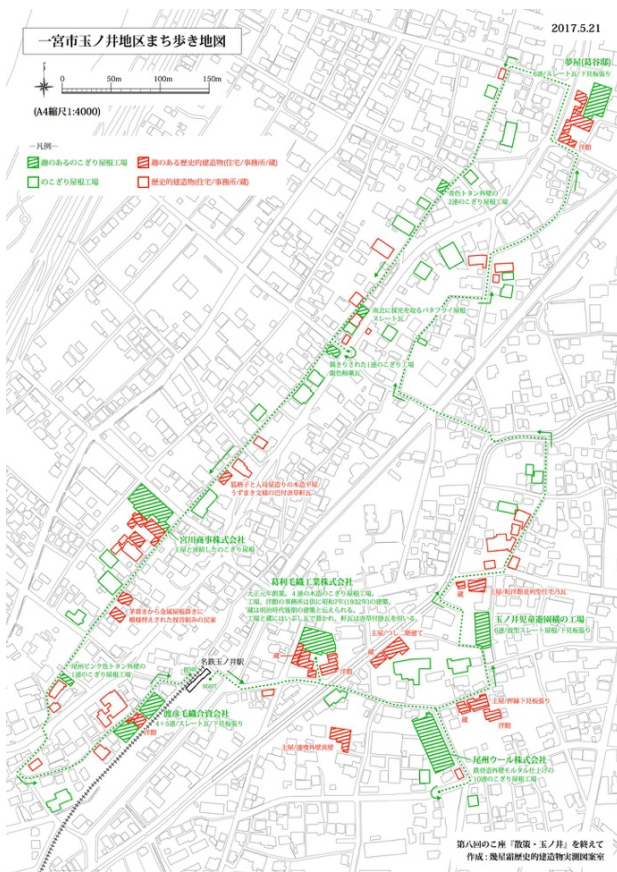
●「玉ノ井散策」を追体験する：玉ノ井駅～御囲堤～宮田用水～葛利毛織～賀茂神社～玉ノ井駅

“タマノイエキノコ”（玉ノ井駅のノコギリヤネ）の傷ついた壁面をホームから眺めた後、改札を出て西側に廻る。ここから、「玉ノ井散策」のマップに従って、その逆コースを辿ることにした。

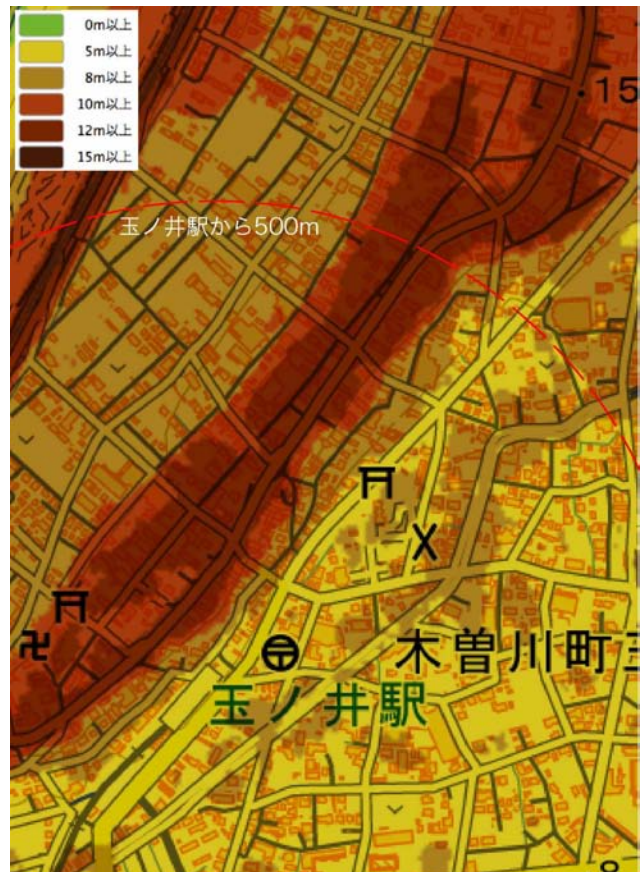
駅の西側から木曽川にかけての一带は、江戸時代に築かれたお囲堤と昭和初期に木曽川沿いに築かれた堤防による「二重堤」のエリアである。お囲堤の上、釈迦寺東側の道路を北東方向に進む。道路はまっすぐ延びており、道路両側にいくつものノコギリヤネを見ながら進む。道路に若干の高低差があり、前方の景観に変化をつける。ノコギリヤネは、道路方向に準拠して立っているの、二重堤のエリアのノコギリヤネの窓は、真北ではなく北東方向を向いている。

釈迦寺から 700m 程進むと T 字路に出る。西方向には木曽川沿いの堤防が見える。東方向には御囲堤のさらに先に二連の三角形が垣間見える。それを目指して上っていくと、やや広い道路に出て、目の前が開けた。そこにはノコギリヤネを従えるように立派な蔵が屹立していた。くだんのノコギリヤネは、四連、五連だろうか、蔵の向こうにまで連なる。その蔵を横に見ながら進み、左に折れて、その先の路地に入る。それは緩やかなカーブを描き、斜め前方にまた新たなノコギリヤネを現出させた。しかし、路地はその先には繋がっていない。奥に立つノコギリヤネを見ながら、ぶつかった道路を左に折れる。その先にまた路地があるようだ。ふと横を見た。中庭に続く幅広のアプローチがあり、そのアイストップにノコギリヤネのシルエットが浮かんだ。まるで、迷路に迷い込んだ旅人を誘い込むように、やや斜に構えたノコギリヤネの壁面が立っている。黙っている。キャンバスか、あるいはタブララサか。

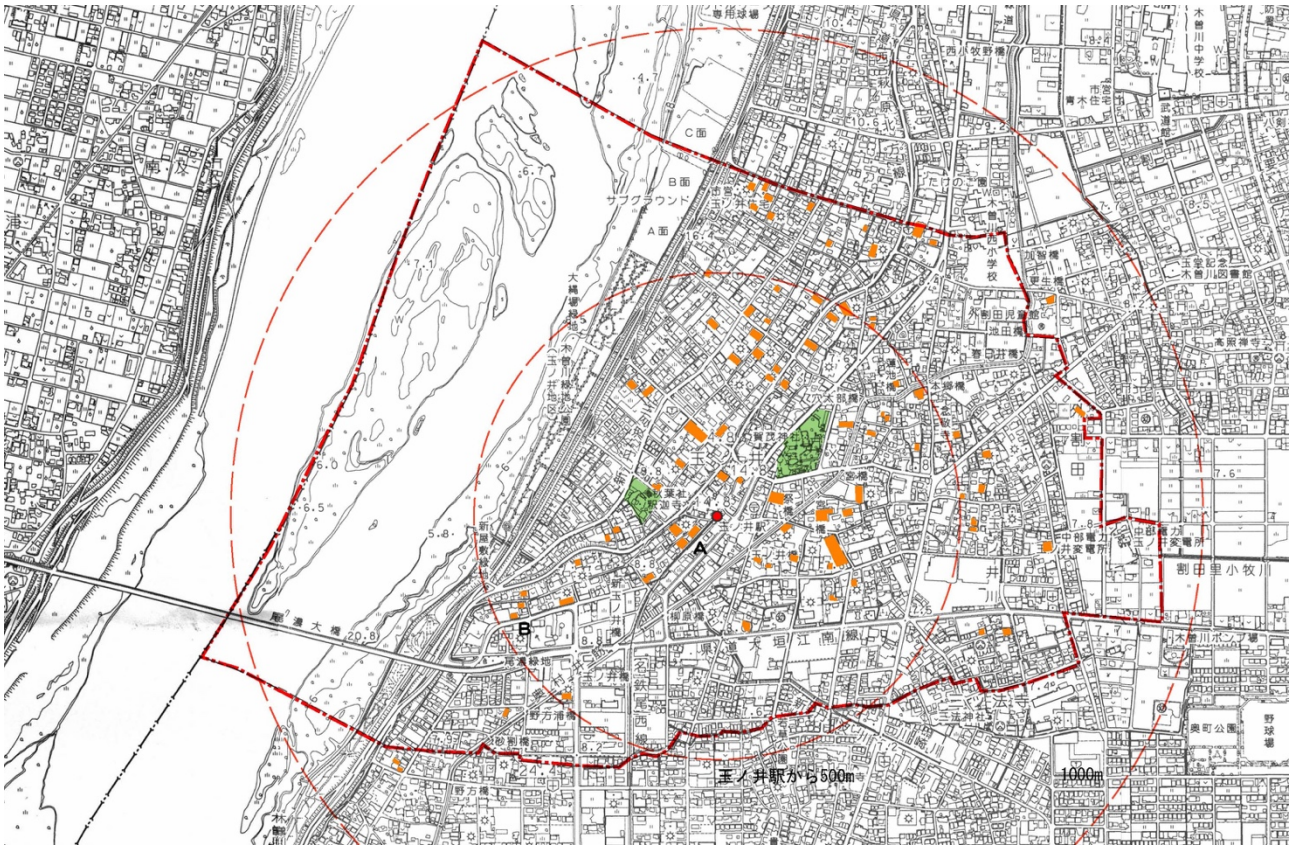
※タブララサ：何も書かれていない書板の意。ロックが、デカルトの生得観念に反対して、人間は生まれたとき全白紙の状態であり、経験からの印象により知識が成立すると主張した際に用いたことば。



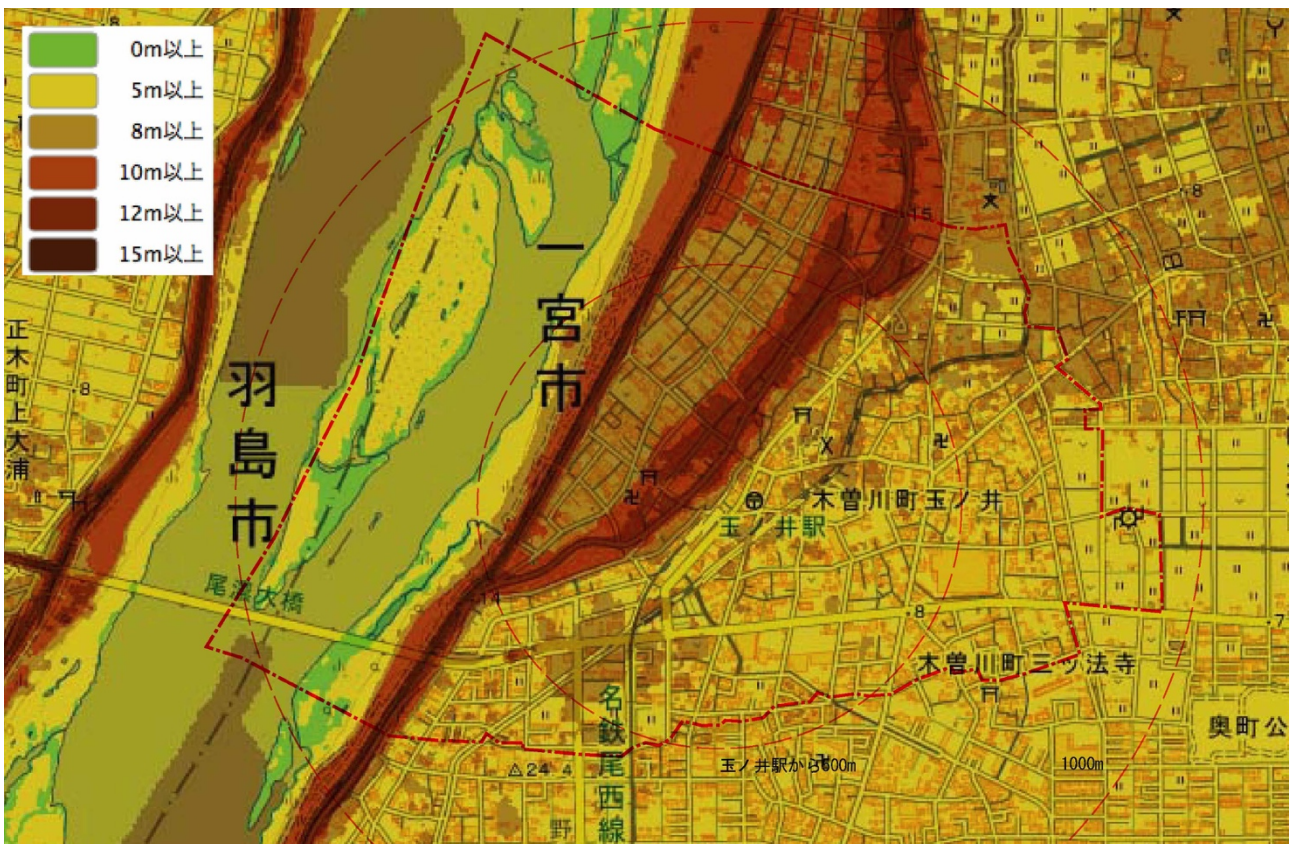
第 8 回のご座「玉ノ井散策」マップ



玉ノ井駅周辺の標高図（地理院地図を加工）



玉ノ井地区のノギリヤネ分布図



玉ノ井地区の標高図（地理院地図を加工）

●20XX 年の風景：“フォリー”としての“織壁”

タブラサを前に、白昼夢に落ちる。いつか来たことのあるまちなのだろうか。懐かしさを感じる。不思議なまちである。いたるところで壁を見かける。建物の壁だけが建っているのである。錆び付いたトタン板をまとった壁もある。消えかかった模様らしきものが残る板壁もある。新しい建物の壁に組み込まれた古い壁もある。銘板が付されたものを見ると、2020 年代に作られたものが多い。聞くところによれば、20 年代初頭、この地域でアートイベントがあったらしい。古びたのこぎり形状の屋根の建造物（それは小さな工場や倉庫に使われたり、あるいは放置されたものもあったらしい）の壁にペインティングを施すものであったという。なぜかそれ以上の詳しい記録が残っていないらしい。

しかし、それをきっかけとして、古びて使われなくなった建物の存在に気づく人たちが現れた。そして再利用されるものも出てきた。そして、建替えたり、撤去する際に、古い壁の一部をそのまま残したり、新しい建築物の壁面に組み込んだりする動きにつながった。“織壁”と呼ばれた。もともと、テキスタイル（染織）の工場であったことに由来している。当時、ノスタルジーと揶揄される向きもあったらしい。織物は縦糸と横糸で作られる。縦糸を流れる時間に、地域の人たちのつながりを横糸に喩えて、連綿と続く人々の暮らしの記憶を“織壁”に託したのかもしれない。土地や家族に対する思いが織り込まれている。まさに、“プライド・オブ・プレイス (pride of place)”である。ある銘板には、「頑強な祖父に見守られて 2021」と刻まれていた。

“フォリー” (folly) と呼ばれる建築がある。「西洋の庭園などにみられる装飾用の建物で、居住や雨風をしのぐといった用途がまったくないもの」(Wikipedia)である。まさに、“織壁”はフォリーではないか。装飾という概念は、のこぎり屋根建築には最も縁遠いもののように思える。のこぎり屋根工場は、合理性、効率性の最たる建築であろう。しかし、“織壁”は、何の役にも立たないものではない。この地域の人たちの誇り、プライドである。だから、こうして、人々の営みが続いているのだ。現代風に“織壁”を考えてみた。「玉ノ井インスタ・ウォール」。インスタはインスタレーションであり、インスタグラムのインスタント。Instant には、「傍に立つ」という意味があるらしい。人々の暮らしにそっと寄り添うように。(しかし、「現代風」というのは、いつのことなのか・・・)



玉ノ井インスタ・ウォール

● “ノコギリヤネのある風景” ～「ガチャ万」の呪縛？

いつの間にか、正面の壁の前に一匹の猫が佇み、こちらをじっと見ていた。先に進めと促された。前方に大きな緑の塊が見えてきた。おそらく賀茂神社だ。その西側を通る尾西鉄道廃線跡の道路を渡り、用水路を暗渠化した遊歩道に出る。遊歩道沿いに気になるノコギリヤネを二棟発見。いつか“織壁”になる日が来るかもしれない。遊歩道を外れ、南下する。そのまま、さらに細い路地を進むと児童遊園に面した六連のノコギリヤネの横に出るが、迂回して広場の方から眺める。六連の壁面が全貌できる。“ヒロバノコ⁶”としておこうか（どう読めばいいかわからないが）。尾州ウールさんの十連ノコの角地に来た。端までは50、60メートルはありそうなのでスルーして、先に進む。先方の道路の角にノコギリヤネの頭が見えてくる。二つ、いや三つか。その先の遊歩道を横切ると葛利毛織さんの正面に出る。

十年ほど前になる。仕事を同じくする仲間と地場産業の根付く地域を訪ねて、明確なあてもなく玉ノ井駅に降りた。駅北の喫茶店の店主から、「それなら、近くにいいところがある」と聞き出し、訪ねたのが葛利毛織さんであった。突然の訪問であったが、あらためて、この地域の繊維産業の底力を実感することになった。しかし、この十年で産業のグローバル化、高齢化の進行等で、繊維産業の衰退が余儀なくされ、それとともに多くのノコギリヤネが消滅したと思われる。歩いて実感したが、空地も多く見かけた。ノコギリヤネは木造建築で安普請が多い。消えてゆく運命にあるのは確かだ。

しかし、古くなり、朽ちてもまだ残るノコギリヤネがある。最盛期には8,000棟、今でも、2,000棟近く残るといわれる。ノコギリヤネって一体なんだろう。どうして、ここまで残ることができたのだろう。よく言われているのは、建物を撤去する費用が無駄、税制面で不利になるからだ。そういう面はあるかもしれないが、金銭的な損得を超えた躊躇いがあるのではないか。それは、祖父・祖母、両親などの家族の思い出の場だから。農家の副業として、地域で協力し、助け合い、時には多少の反目や諍いとともに、戦後から高度成長期の時代を生き抜いてきたから。そんな農村共同体で生きてきた自分たちの姿を重ねてしまうからかもしれない。頑強で、気骨があり、朴訥な風情のノコギリヤネに。

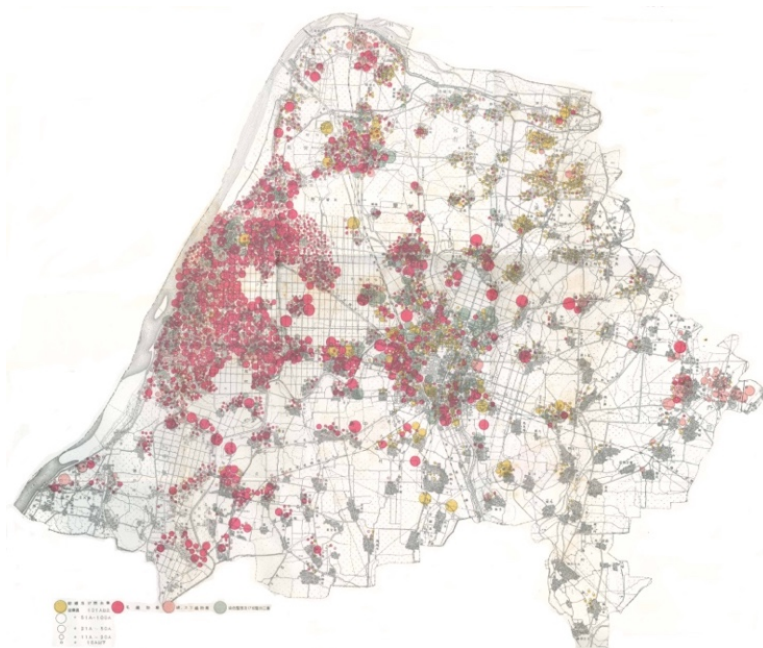
一方で、ガチャ万の象徴とも言えるノコギリヤネ。農家の暮らしを支えたノコギリヤネはまさに金を稼ぐ場であった。農民らしい真面目さ、勤勉、知恵、共同性などが功を奏した。そして多くの富が生まれた。ノコギリヤネは成功体験の名残でもある。だから壊せないという訳ではない。ノコギリヤネを撤去しなくてもよいだけの財、富がまだこの地域には残っているのだろう。しかし、それは個人に細分されたものである。かつて産業で財を成した多くの地域には、魅力のある大きな公園や美しい通り、高級住宅地などが残っている。「まち」という共同体に還元されているのである。この一宮市という地域ではどうなのか。財・富が分散されてしまった。そして残ったものが、個人の持ち物であるノコギリヤネではないだろうか。だから、ノコギリヤネは個人の所有物ではあるが、かつて共同体であったまち、むらのものと言えなくもない。以前、平松さんがこんなことを言っていた。「ノコギリヤネは家族のためのものではない、まちのためのもの。だから開いていくことが必要です」と。

今日、出会ったノコギリヤネたちは芯の強い農民のように、力強く立っていたが、みな寡黙であった。自らの傷ついた壁がその存在を主張していた“タマノイエキノコ”を除いては。みな黙っているのは、「ガチャ万」に対するアンビバレントな感情の故か。「ガチャ万」の呪縛が、彼らを寡黙にしているのか。それが“ノコギリヤネのある風景”かもしれない。本当は、まちとの対話を望んでいる。

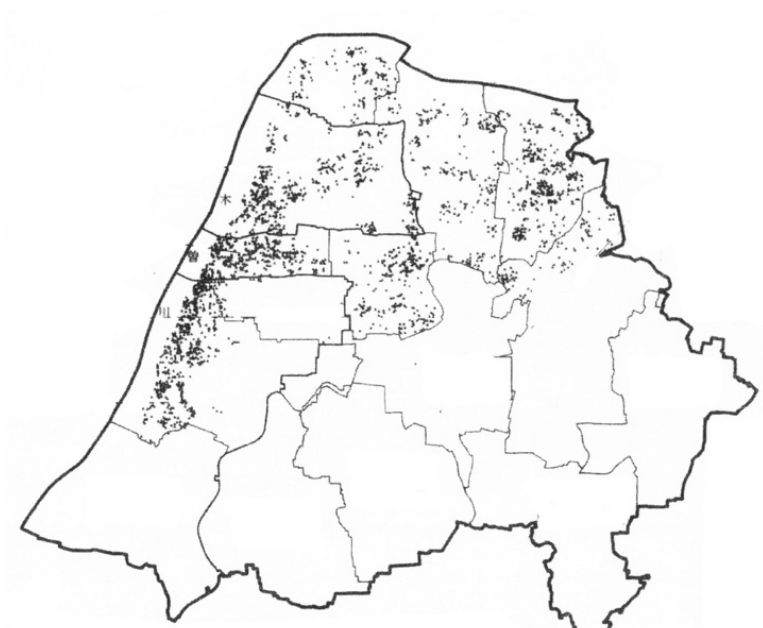
「ガチャ万」ではなく、1970年代後半のテレビアニメに「ガッチャマン」という正義のヒーローがいた。高度経済成長による歪みが明らかになり、都市計画の世界では、開発による発展とは異なるビジョンが提示された。例えば、三全総（第三次全国総合開発計画）がそうだ。その後の展開次第で、いまとは違う日本になっていたかもしれない。当時に戻っていまの時代を考えてみることは、決して愚かな行

為ではないと思う。それは現在を否定して、昔に戻るということではない。どうしてこういう社会になったかを見定めることが大切であり、そこに未来に対する気づきが生まれるはずである。歴史に学ぶとはそういうことだろう。ノコギリヤネはその時代の生き証人である。彼らと対話することから見えてくるものがあるはずだ。いま、世界正義のために戦うヒーローを求めるのは時代錯誤だ。日々の暮らしの中で、これからの生き方を提示してくれる新しいヒーローが出てくるのではないか。それは、ノコギリヤネを「ガチャ万」の呪縛から解放することとリンクしているような気がしている。

地域の衰退で、空地が増えてきたことが懸念されている。その一方で、かつて風景に埋もれていたノコギリヤネの姿が見えるようになった、奥に隠れていたノコギリヤネが表舞台に出てきたとも言える。それは、地場産業の再生や地域づくりといった旧来型の正義ではなく、自分たちの生活・暮らしを担っていく「主体」が見えるようになったということではないか。まち、地域にとって、喜ぶべきことではないだろうか。



昭和 30（1955）年の一宮市の繊維工場分布図（一宮市調査報告、1958 年）



ノコギリヤネ分布図（尾張のこぎり調査団、2010 年、南側は未調査）

● “のこぎりゼロ” と “のこぎり三”

「のこぎり二」は、まさに「ガチャ万」の呪縛から解放されたノコギリヤネである。「のこぎり二」は、「コウバ（工場）」としての役割を終えた後、新たな生命が吹き込まれた。設計者本人の平松さんによれば、本来のコウバを「のこぎり一」と考え、その中身が変わったものとして「のこぎり二」としたらしい。だから、空っぽのノコギリヤネや物置になっているノコギリヤネも二であるという。では、「のこぎりゼロ（0）」は何かと問えば、「のこぎりが建ったきっかけみたいなもの、田んぼとか民家とか・・・、わからないですが」という。ワタシは、何もない状態、つまり「空っぽ」になったノコギリヤネをゼロと考えていた。面白い。用途の変化じゃなかったんだ。しかし、この時、ワタシは、まだ気づいていなかった。彼がことばを濁した本意について。ノコギリヤネは将来、消えてなくなるものだ。それは「のこぎり二」も例外ではないということ。

ギロンは、「のこぎり三」に移行した。ワタシは、用途・機能の変化とは異なる要素が加わるものとして、事業形態の変化を考えてみた。例えば、ノコギリヤネの所有者と再利用を目論む利用者（事業者）という二つの関係主体ではなく、隣接する道路や公園などの公共空間を含めた一体的な空間へと対象を拡大することで、ノコギリヤネの可能性が広がるというもの。まちづくり屋が考えそうなことである。彼は、「そうかもしれません」といいながら、「それが家族の形にもつながっていくといいな」と付け加える。そうか、わかった。彼が「のこぎり」を考えると、そのベースには家族が存在するという。しかし、それは、農村共同体で育まれてきた家族ではない。地域に開かれた新たな家族のカタチを考えているのであろう。かなり端折ってしまうが、尾張という地域が、古代に多くの部族、氏族の融合した「異族」の連合体であったように、新たな「異族」のカタチが必要なかもしれない。

玉ノ井駅に隣接する「タマノイノコ（タマノイエキノコ）」をめぐるこれからの展開、玉ノ井地区を舞台としたアートプロジェクトの構想の中で、「のこぎり三」の新たなイメージが見えてくるのではないだろうか。実は、白昼夢で見た“織壁”も「のこぎり三」と言えなくもないが、これではノコギリヤネの葬送シナリオである。しかし、「のこぎり三」を考えていくことが、ノコギリヤネを呪縛から解き、未来の“ノコギリヤネのある風景”を描くことにつながってくるような気がしている。



のこぎり二



のこぎりゼロ？

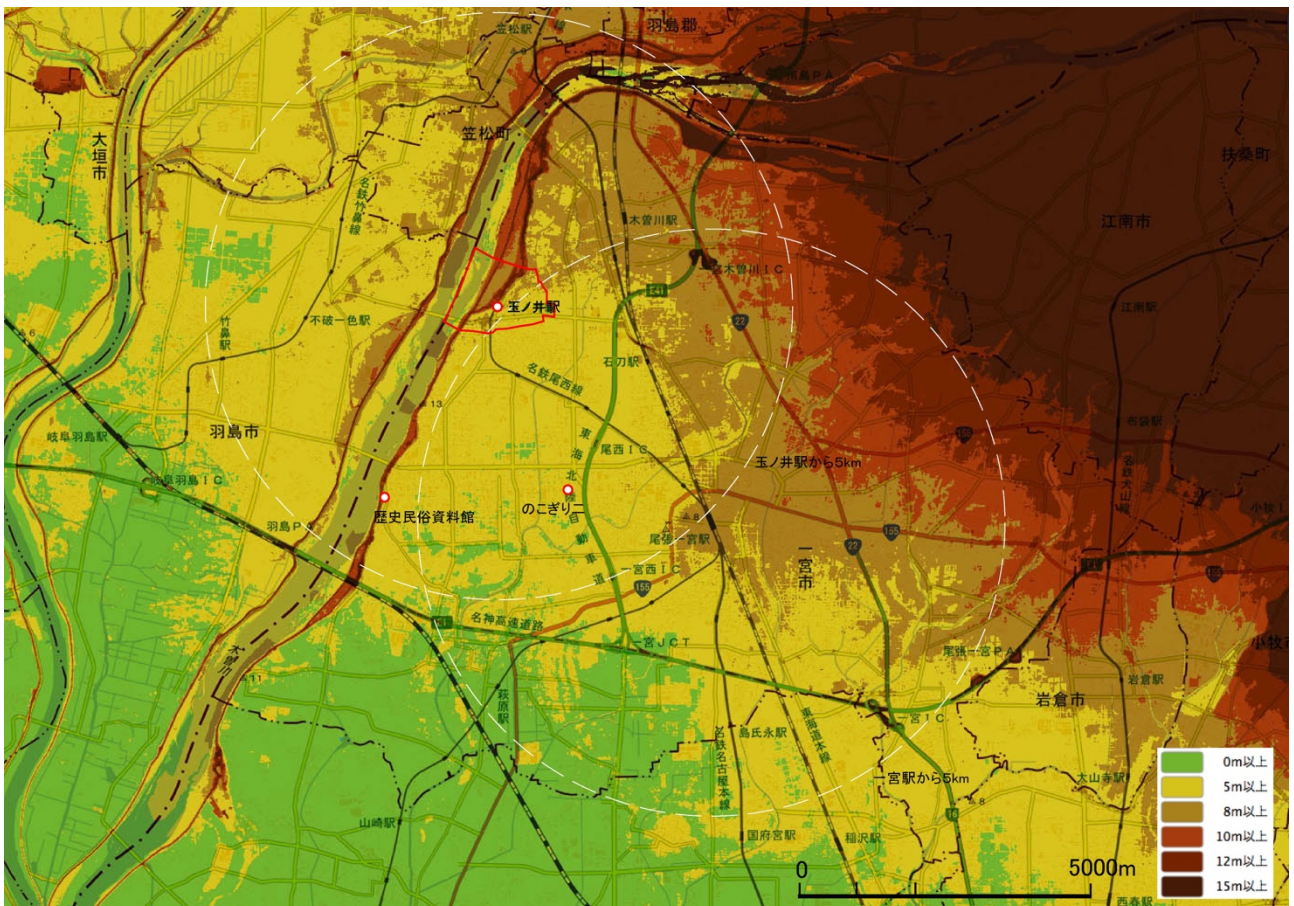
●「玉ノ井・タウンキュレーション」

「玉ノ井散策」のルートによれば、葛利毛織さんから玉ノ井駅に戻ればよいのだが、せっかくなので、玉ノ井地区の真ん中に鎮座する賀茂神社に詣でた。ここには、玉ノ井の地名の由来である「玉ノ井霊泉」がある。玉ノ井とは井戸の美称で、光明皇后の眼病治療に効果があったという言い伝えが残る。

葛利さんのノコギリヤネの見える西側の道を歩く。右手に四連のノコギリヤネが建地、その向かいには、「玉乃井湯」「八百清」と続く。ノコギリヤネの板壁に触れてみる。その壁の向こうから、織機の音が聞こえてくる。初めて通る道なのに懐かしく感じてしまう。訪問者の私には、織機の音が心地よい。

昨年2月、のこぎり二で、「のこやねライブ」と称して、葛利さんの工場内でサンプリングした音を使った新たな音楽を創造する試みが催された。昭和時代を知る者には、ほとんどノイズであったものが、それを「まちの音」として捉えた若者がいて、新しい音楽を創造するアーティストがいた。「キュレーション」というワードが浮かぶ。「溢れる情報の中から、ある種の価値観に基づいて情報を拾い上げ、そこに新たな意味を付加し、多くの人たちと共有すること」をいう。美術館等の学芸員をキュレーターと呼んでいるが、限定する必要はない。ノコギリヤネはまさに地域に溢れる情報である。「あんなものゴミじゃないか」と言う同郷の友人がいる（本心ではないと思うが）。そのノコギリヤネに新たな意味を付加してそれを共有する。「タウンキュレーション」というアプローチがありそうだ。

玉ノ井駅に戻り、あらためて破損したノコギリヤネを見た。傷を負ったノコギリヤネの壁にアートプロジェクトの予兆を見た。アートは、普通には見えなかったものを見せてくれる。見えなかった、気づかなかったノコギリヤネを気づかせてくれるはずだ。同時に、「ガチャ万」の呪縛を解いてくれると期待している。それは地域の人たちを傷つけるかもしれない。アートとはそんなものかもしれない。



一宮市周辺の標高図（地理院地図を加工）

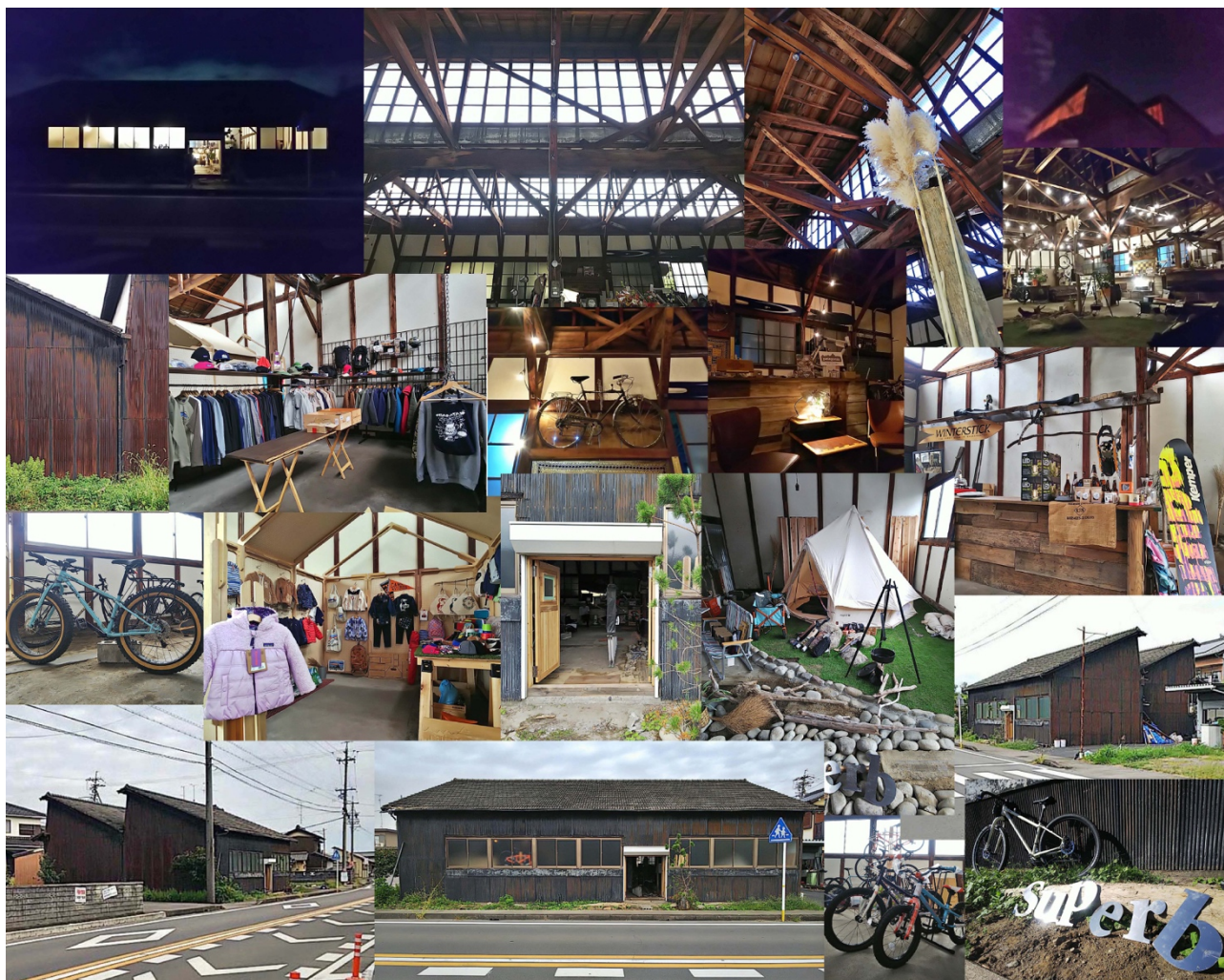
○エピローグ／新世界への入り口

のこぎり二で「二坪の眼」を主宰する青木さんと玉ノ井駅前で待ち合わせた。小一時間、駆け足で廻ってきた玉ノ井のまち、初めて歩くまち、そこで出会ったいくつかのものノコギリヤネ、そしてここを舞台にアートプロジェクトが展開されることへの期待感から、少々気持ちが高ぶっていた。彼の運転するライトバンに乗り込み、ここまでのことを語った。ひとしきり意見交換した後、青木氏はおもむろに「これからお連れしたいところがある」と言い、車を発進させた。どうやら、ノコギリヤネを再利用したアウトドアライフのお店らしい。オープンしてまだ一週間で、実は今日は休みだったらしいのだが、無理を言って開けてもらったとのこと。昨日見つけたと言う。(オイオイ青木さん、ホンマかいな)

それは、木曽川対岸の羽島とつなぐ尾濃大橋のすぐ近くにひっそりと立っていた。一見、何の変哲のない二連のノコギリヤネである。看板、サインの類もない。道路に面する正面に一間四方の入り口があり、その両側にはサッシ窓が連続する。入り口と窓の開口部は新調したもののようなのだが、外壁の黒い波トタンは年季が入っている。

足を一步踏み入れた途端、「おっ」と発してしまう。「のこぎり二」に初めて足を入れた時の感動を思い出す。正面斜め上に窓が並び、ノコギリヤネ特有の優しい光が内部を照らし出す。自転車が出迎えてくれた。自転車屋だったか？ いや、右側にはテントが設営されている。あれは、コーヒースタンドか、バーカウンターか。子供服も並んでいる。カオスだな。「服を作るのに、北側の光がいいなら、売るにもいいと思って。本当の色合いを見てもらえろ」と光川さん。この店のオーナーである。ノコギリヤネは借りたものと言う。「ここでバーベキューもやりましたよ」どうやら、彼をサポートする仲間がいるらしい。ひとしきり中を見た後、中央に置かれた椅子に座り、自然な雰囲気ではじめた。ショップというより、「場」をつくるのが目的だと言う(書ききれません。ここ Superb については、青木さんの周到な事後取材の一端が、SNS 上に発信されているので、そちらをご覧ください)。彼との話の中にこんなフレーズがあった。「頑強なおじいさんに守られている気がする」。頑強なおじいさん……あれ、どこかで見たような(p5)……デジャブ？ ここも、呪縛の解けたノコギリヤネである。タマノイノコから、ひとりの現代のヒーローが現れた。昭和のヒーローは、世界の正義を求めたが、令和の新しいヒーローは違う。彼らはネットで世界とつながっている。彼らの目指すのは、遊びの延長に捉える生活の豊かさ、楽しさである。玉ノ井には地の利がある。一宮の端、尾張の端(終わり)に位置する。羽島方面との連携も可能だ(もともと羽島の一部は尾張に含まれる)。いつの時代にも、境界、周縁は文化発祥のフロンティアであった。玉ノ井の地名よろしく、時代を担う人たちのエネルギーの源泉となることを期待したい。呪縛の解かれたノコギリヤネたちが続くことを。





Superb mandara

【追記】

Superb（スパーブ）、光川慎太郎さんとの出会いは、「二坪の眼」の主宰者・青木俊克さんのお膳立てによるもので、彼がここを発見したのは、ワタシと会う前日のことだったと聞いて驚きました。偶然が幸運を招く、まさにセランディピティですが、これは日頃からの入念な情報収集のなせる技ということでしょう。

また、後日、SNS 上での真面目+たわいのないやり取りが、この拙稿の誕生するきっかけとなり、内容に関しても多くの示唆をいただきました。本稿の出来栄えはともかく、編集者（偏執者ではありません）と書き手のような関係を楽しむことができたのは新しい発見です。フェイスブックも捨てたものじゃないかもと認識を新たにしたところです。

また、写真は全て青木さんの撮影されたもので、彼のカオス的 Facebook から、「オープンソースのスクラップブックだから自由に使って」というお言葉に甘えて、適宜加工しております。感謝感謝。

2019. 10. 31